

小学生のための着衣水泳の指導

— 子どもの命を守るサバイバルテクニク —

荒木昭好監修・藤本秀樹編著（黎明書房）

十文字学園女子短期大学

千足耕一

服を着たまま水にはいる「着衣泳」が新聞やテレビなどで紹介されるようになり、地域あるいは学校で実践されることも多くなってきた。平成八年七月の日本体育施設協会の実態調査では、小学校で四三・三％、中学校で二二％、高等学校で一一・六％が実施しており、全体では三五・一％の実施率となっている。

日本における水難事故は減少傾向にあるが、年間一二〇〇から一三〇〇名の水死者が出ている。その七割が服を

着たままの状態であることから、着衣泳を教育に取り入れ、水に落ちたときの対処や心構えを備えておくことは意義あることであろう。

この著では、諸外国の着衣水泳の状況や日本における着衣水泳の発端や普及についての経緯が掲載されており、その必要性について述べている。著者らは着衣水泳について研究し、実践している代表的なグループのひとつであり、これまでに先駆的な取り組みを多く行ってきた。そこでできた問

題意識のひとつに「小学生段階における着衣水泳の必要性」がある。水泳教育の中で泳力をつけるとともに、着衣の状態でも物につかまって浮く、岸に戻る、溺れている友達をどのように救助するかといったサバイバルのための水泳が泳力の備わっていない小学生段階から必要と考えたのである。

これまでも着衣泳の必要性や実践プログラムに関して紹介されている著書はある。この著においては、法則化体育授業研究会と慶應義塾幼稚舎の指導実践例を紹介している。このように発達段階に応じたプログラム実践をより具体的に紹介し、それを指導者・受講者の両者より評価しようとしている点はこれまでの著書にみられない。そのなかで指導実践経験のないものでも指導できる可能性を持たせたこと、溺水事故に至らないように安全教育を全

面に押し出していることはこの著の特徴である。たまた、プールの衛生面への配慮や実施の時期・時間、安全に配慮した教師の位置、事故を想定した擬似体験の必要性と多様なプログラムの必要性についてなど、実際の実施にあたって重要な示唆が得られるよう構成されている。

加えて、受講者の作文から教育効果を探ろうとしている点がこれまでの著書に見られないオリジナリティーを有している。学習経験を文章で表すということは、綴る過程で学習状態や態度などを振り返り、自己を評価することであり、その評価をもとにこれからの自分の学習の進め方やめあてを明らかにする活動にほかならないと述べられている。さらに実際の作文を掲載し、教師が授業の意図と子どもの学習内容とのズレを読みとったり、評価するの

みではなく、「子どもたちひとりひとりが何を学んだと思っているか」という視点からの評価の大切さに言及している。このように評価や作文についてまで考察された著書は他に類をみない。今後、有効かつ実用的と考えられる着衣泳の実践はますます増加することが予想される。この普及過程における手引き書としてこの著は大変有効であろう。ほか視覚的に学ぼうとするVTRでは、「着衣泳実技トレーニング」(山海堂・野沢巖監修)や「服を着たまま水に落ちたらどうするか」(財)競艇保安協会、文部省が平成六年度に作成した「学校体育指導ビデオ」、または、(財)リバーフロント整備センター「着衣泳入門」などが参考となるであろう。

(講師)

参考文献

- ・荒木昭好・佐野裕(一九九三) はじめての着衣泳、山海堂
- ・荒木昭好・野沢巖(一九九五) 着衣泳実技トレーニング、山海堂
- ・野沢巖(一九九八) 着衣泳を指導する、小三教育技術
- ・バル・スイミング(一九九五) 平成七年度教職員夏季実技講習会資料「着衣泳セミナー」スライムスミリング
- ・渡邊彰(一九九六) 着衣での水泳指導について、スポーツと健康Vol.28 No.6
- ・吉田章・真竹昭宏・千足耕一(一九九一) 水辺野外活動における事故の推移、筑波大学体育科学系紀要一四：二四五—二五三
- ・(財)競艇保安協会(一九九六) VTR 服を着たまま水に落ちたらどうするか
- ・(財)リバーフロント整備センター(一九九二) 河川親水化と水辺事故防止調査業務報告書